

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：32404

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13512

研究課題名(和文) 言語統計解析モデルに基づく英語語彙指導の最適化

研究課題名(英文) Optimizing Instruction for English Vocabulary Learning Using Statistical Language Analysis

研究代表者

濱田 彰 (Hamada, Akira)

明海大学・外国語学部・講師

研究者番号：50779626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人英語学習者が「コンテキストの中で使える語彙知識」を習得するのに求められる学習量と質(言語インプットの量と質)を、言語統計解析モデルにより推定した。3年目までの研究より得られた知見は次の通りである。[1]日本人英語学習者の語彙知識の発達過程は言語統計解析モデルでシミュレートできる。[2]教科書で扱われている単語の量と質は限定的であり、様々な言語運用場面で求められる語彙知識の習得には至らない。[3]学習方略・言語適性・動機・不安・認知機能といった学習者の個人差要因により語彙学習の効果は異なる。研究成果については国内外の関連学会で発表するとともに、査読付き論文として出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、英語検定教科書を中心としたコーパスと、学習者の語彙知識の発達過程を直接観察したデータとの対応を図ることで、小中高の英語語彙指導における最適な学習量と学習の質、およびそのバランスを明らかにした点に学術的・教育的意義がある。また言語統計解析モデルは、語彙知識に限らず、ライティング・スピーキング等の言語パフォーマンスにも応用可能であるため、将来的には英語学習に最適な学習量と学習の質を推定するための基礎データを提供できることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study used a statistical language analysis to estimate the quantity and quality of input required for Japanese learners of English to acquire contextualized vocabulary knowledge. The findings are: [1] the developmental process of lexical knowledge of Japanese learners of English can be simulated by the statistical model; [2] the vocabulary input through textbooks are limited and does not lead to the acquisition of vocabulary knowledge required in a variety of communicative situations; and [3] the effect of vocabulary learning differs depending on individual factors such as learning strategies, language aptitude, motivation, anxiety, and cognitive functions of learners. The results of this study were presented at academic conferences and published as refereed papers.

研究分野：英語教育学

キーワード：第二言語習得 英語教育 語彙指導 コーパス 潜在意味解析 自然言語処理 インプット データ駆動型学習

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

言語使用には様々な知識・技能が関わるが、その中でも語彙知識の占める割合は大きい (Nation, 2013)。日本の英語教育においても語彙知識の重要性は認識されており、2008 年度・2009 年度公示の学習指導要領では指導すべき語彙数を以前の 2,200 語から 3,000 語に増やしている。2017 年度・2018 年度公示の学習指導要領では、小中高で指導する語彙数が 5,000 語へとさらに増えることとなった (中央教育審議会, 2016)。

これだけの語彙数を学習時間の限られた日本の英語教育においてどのように指導すべきかが重要な課題になっている (全国英語教育学会, 2014)。豊富な語彙知識の習得を目指して様々な指導法や教材開発が行われているが、学習量が多いほど、また学習の質が良いほど効果が高いことは自明である (Schmitt, 2010)。本研究では、英語語彙習得のための最適な学習量や、学習の量と質のバランスを明らかにすることで、限られた学習時間の中で効果的・効率的な語彙学習を可能にするための語彙指導の最適化を目指した。

本研究は、外国語の語彙知識を習得するための最適な学習量を推定しようとする一連の研究を学術的背景として持つ。先行研究は言語活動に付随的な語彙習得のために必要な学習量の推定に向けて、学習させたい語 (目標語) の学習機会を要因とし、その認知プロセスや学習成果を検証してきた。

- ・ 学習機会: テキストの中で目標語に 3 回以上遭遇すると暗示的知識のレベルで習得が始まり (Elgort et al., 2015) 8 回を超えると言語使用の場面で知識を活用できる (Pellicer-Sánchez, 2015)。ただし、学習機会が 9 回未満だと長期記憶には保持されにくい (Reynolds & Wible, 2014)。
- ・ 認知プロセス: テキストの中で未知語に遭遇すると、学習者はその語の情報を周りの文脈から推論し (業績 [4], [16], [18], [21]), 知識として記憶することができる (業績 [23], [25], [26])。
- ・ 問題点: 学習者の外国語習熟度、目標語の特性、インプットの質など様々な要因による系統誤差を分析したとしても、最適な学習量は明らかではない (Elgort & Warren, 2014)。語彙知識の測定には同義語選択課題・脳波計測・眼球運動測定などが使われているが、これらは「実際の言語使用の場面で知識を評価する」テストではない (Godfroid & Spino, 2015)。

語習得や知識の発達過程をシミュレートする方法として、教育ビッグデータとしてのコーパスを利用する言語統計解析モデルが注目されている (Biemiller et al., 2014)。言語統計解析モデルの 1 つである「潜在意味解析 (latent semantic analysis: LSA)」は、外国語としての英語語彙習得に必要な学習量の推定に応用可能であることが示されている (Hamada, 2014)。LSA は、コーパスをインプットとした機械学習の結果、概念間の意味的類似度を空間ベクトル上のコサインで数値化できる (Landauer & Dumais, 1997)。例えば Landauer et al. (1998) は、61,000 語句の学習量であれば TOEFL® の同義語選択課題で 65% の正答率となり、それは平均的な非英語話者大学生の得点率および誤答パターンと一致したことを報告している。同様に Biemiller et al. (2014) は、LSA が予測した英語母語話者の幼児から大学生までの語彙知識の発達過程は、母語話者に直接テストした結果と強い相関関係にあったことを明らかにしている。

### 2. 研究の目的

外国語としての英語語彙知識は、累積的な学習経験を経て発達することが明らかにされている。しかし、どのような質のインプットをどれだけ与えれば良いのかという具体的な教育的示唆は得られておらず、インプットが知識として定着する過程を解明するには至っていない。本研究はこれらの問題点を解決した上で、最適な学習量と学習の質に基づく語彙指導の効果を明らかにすることを目的とした。具体的には、4 年間の体系的な研究を通して、次の 3 点を完遂した。

- [1] LSA による日本人英語学習者の語彙知識モデルとデータベースの構築
- [2] 知識モデルの妥当性検証を通じた語彙学習における最適な学習量と質の推定
- [3] 推定された学習量と学習の質に基づく語彙指導の効果の解明

### 3. 研究の方法

本研究の第 1 段階として、英語検定教科書等のコーパスから学習者を模した知識モデルを構築し、各種語彙テストに知識モデルがどの程度正解できるのかを検証した。その結果に基づき、特定の単語の習得にはどれぐらいの学習量と質が求められたのかをコーパス分析により検証した。続く第 2 段階として、実験研究・介入研究を通して、最適化されたインプット環境における語彙指導の効果を検証した。実験研究では、知識モデルが推定した最適な質を持つインプットを最適量与えた実験群と統制群の語彙学習の成果を比較した。介入研究では目標語の学習機会とどのような文脈で学習する機会があったのかを要因とした多読プログラムを実施し、教育的介入による語彙学習の効果がどの程度あるのかを分析した。

LSA の主な手順は、(a) 語句×文書行列の作成、(b) 特異値分解と次元縮約、(c) 意味的類似度の計算である (Landauer et al., 1998)。以下に示した例のように、語句×文書行列の時点では“learning ↔ English” の相関係数が-.33 となり、この値は“learning ↔ test” と同じになるなど、論文タイトルとして使用された *learning* の意味を捉えられていない (図 2)。特異値分解による次元縮約後の *learning* と各語の意味的類似度は図 3 のようになる。意味的類似度を計算した結果、“learning ↔ English” の値は.87 になる一方、“learning ↔ test” の値は.35 に留まるなど、論文タイトルで使われた *learning* の意味をある程度捉えることができるようになる。

v1: Assessing the dimensionality of three hypothesized sub-skills of L2 vocabulary proficiency
v2: Japanese EFL learners' vocabulary learning strategies from the perspective of word frequency
v3: Estimating vocabulary size: Does test format make a difference?
v4: Development and validation of the PC version of the Mochizuki vocabulary size test
w1: A scaffolded English writing course for Japanese university students
w2: English writing in Japan: Toward integration
w3: The learning outcomes of an academic writing course: A study of Japanese university students
w4: Developing a writing rubric for classroom use in Japanese higher education

図 1. 『大学英語教育学会紀要』より抽出した語彙学習・ライティング研究の論文タイトル

	v1	v2	v3	v4	w1	w2	w3	w4
vocabulary	1	1	1	1	0	0	0	0
Japanese	0	1	0	0	1	0	1	1
<b>learning</b>	<b>0</b>	<b>1</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>1</b>	<b>0</b>
size	0	0	1	1	0	0	0	0
test	0	0	1	1	0	0	0	0
course	0	0	0	0	1	0	1	0
<b>English</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>0</b>	<b>1</b>	<b>1</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
student	0	0	0	0	1	0	1	0
university	0	0	0	0	1	0	1	0
writing	0	0	0	0	1	1	1	1

図 2. 語句×文書の生起頻度行列

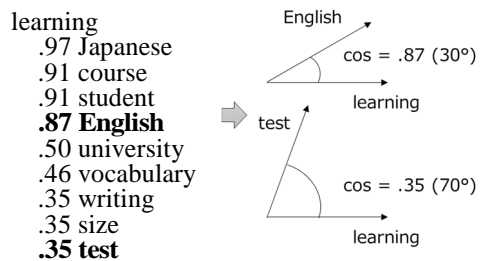


図 3. learning と各語の意味的類似度

第 1 段階では、語彙習得に必要な学習量を推定するために、コーパスを使用して英検 1 級から 5 級までの語彙問題における「基幹部」と「選択肢」の意味的類似度を算出した。以下の例は、英語母語話者の知識モデルから英検 2 級・語彙問題の解答パターンをシミュレートした結果である。小学 3 年生の知識モデルは、基幹部の意味に最も近いのは *prosperity* だと判断した。しかし *prosperity* と基幹部の意味的類似度は学習量が増えるにつれ減少し、12 年生以降の知識モデルでは *accuracy* が文脈に最も良く当てはまると、正しく判断できるようになっている。*accuracy* をコンテキストの中で正しく使えるようになるのが 12 年生と仮定すると、それを構成する教科書コーパス (中 1~高 3) を参照し、(a) *accuracy* を学習する機会は何回あったか (学習量)、および (b) どのような文脈で学習する機会があったか (学習の質) を知ることができる。

After the TV station bought new equipment for its weather department, the ( ) of its forecasts improved. Now, it makes fewer mistakes when reporting the weather.

3 年生	1. accuracy (n/a)	2. discovery (-.01)	3. gravity (.03)	4. prosperity (.14)
6 年生	1. accuracy (-.04)	2. discovery (.05)	3. gravity (-.03)	4. prosperity (.07)
9 年生	1. accuracy (.02)	2. discovery (.06)	3. gravity (.00)	4. prosperity (.03)
12 年生	1. accuracy (.07)	2. discovery (.05)	3. gravity (-.05)	4. prosperity (-.03)
大学生	1. accuracy (.16)	2. discovery (.04)	3. gravity (-.02)	4. prosperity (-.02)

第 2 段階では、最適な質を持つ文脈的インプットを最適量与えた場合、日本人英語学習者の語彙知識は統制群と比べてどの程度向上するのかを統計的に解析した。さらに、英語多読プログラムを行い、目標語の学習機会とどのような文脈で学習する機会があったのかを要因とし、多読における学習量が語彙知識の向上にどの程度繋がるかを検証した。

#### 4. 研究成果

第 1 段階で得られた研究成果は以下の通りである。

- (1) テキストからのインプットが累積的に増加すると、語彙問題における基幹部と意味的に類似した単語を判別できるようになる。
- (2) 大学生までに受けるインプット量とそれまでに受けるインプット量での語彙知識を比較すると、語彙知識は、インプット量が増加するにつれて大学生レベルの語彙知識に漸次的に近づくようになる。

1 点目については、学習者が受けるインプット量を 3 年生、6 年生、9 年生、12 年生、大学生以上に分け、それぞれで語彙問題に対する正答率がどのように変化するかを検証した結果である。図 4 が示す通り、英検準 1 級から英検準 2 級まで、インプット量が増加するにつれて平均正答率が向上していることがわかる。より具体的には、3 年生のインプット量から大学生までのインプット量へと累積的に学習が進むにつれて、平均的に正答率が 5% ずつ上昇していた。正答率の上昇は難易度の高い級において顕著であり、易しい級ではインプット量がある程度少なくても高い正答率に至っていた。

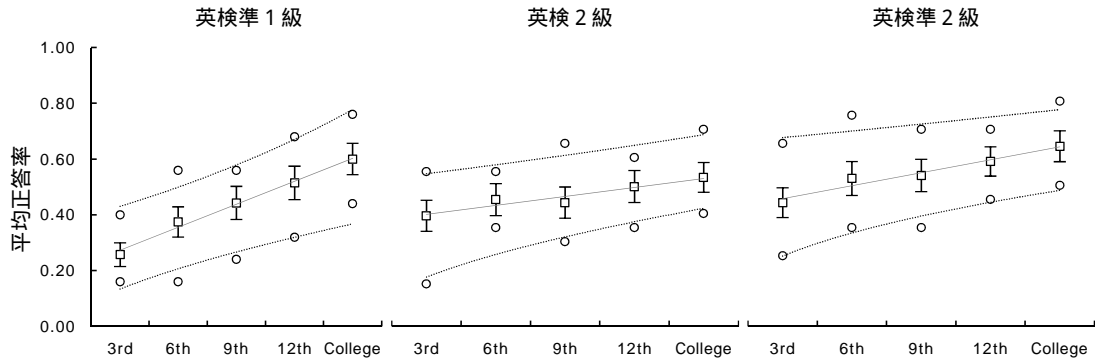


図4. インプット量ごとの平均正答率の推移

2点目については、大学生までに受けるインプット量を基準とし、3年生、6年生、9年生、12年生の意味的類似度判断との相関を検証した結果である。図5が示す通り、学年が上がるにつれて意味的類似度の判断が大学生に似てくるのがわかる。つまり、LSAはインプット量を要因とした語彙知識の発達を適切に捉えることができていると言える。

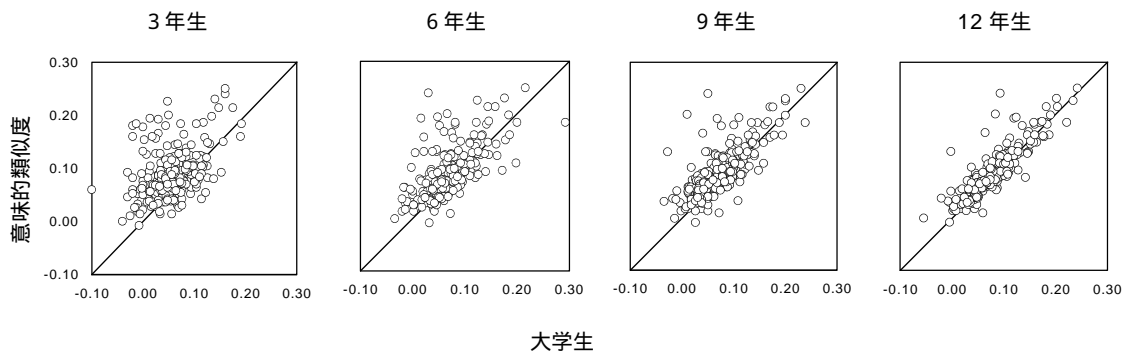


図5. 大学生までに受けるインプット量を基準とした意味的類似度判断の相関

第2段階で得られた研究成果は以下の通りである。

- (1) 文脈と目標語の意味的関連度が高いほど、目標語の意味を学習することができる。
- (2) 文脈と目標語の意味的関連度が高いほど、目標語の使い方を学習することができる。
- (3) 文脈と目標語の意味的関連度が語彙学習に与える影響は学習ストラテジーを媒介する。

これらの成果は、リメディアル教育を必要とする日本人大学生が文脈と目標語の意味的関連度を操作した例文を用いて語彙学習をした結果に基づいている。まず、学習者は自身が用いる学習ストラテジーによって3つのクラスターに分割された。クラスター1は学習ストラテジーを使用しない・使用できないグループ、クラスター2はイメージと文脈を使用するグループ、クラスター3は連合学習と文脈を使用するグループであった。様々な文脈の中で目標語を意図的に学習した後、Vocabulary Knowledge Scaleにより学習成果を評価した。

図6は目標語の意味に関する成績を示している。意味的関連度の高い文脈(HS)では、たとえ学習ストラテジーをあまり用いないグループであっても、その他のグループと同程度に目標語の意味を学ぶことができていた。一方、文脈と目標語の意味的関連度が低い例文(LS)だと、高い例文と比べて学習効率が低下することがわかった。また、この影響は学習ストラテジーを用いることができないグループに顕著にみられた。

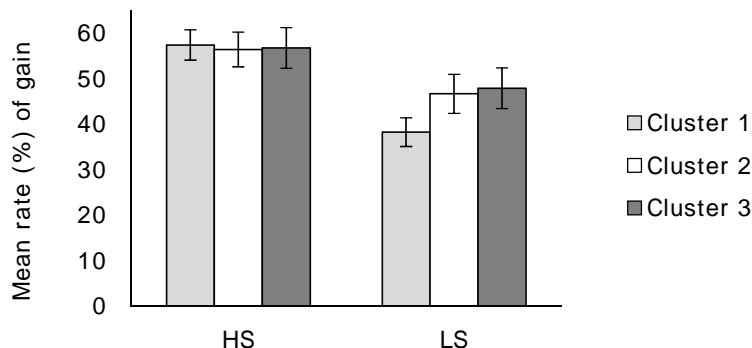


図6. 目標語の意味の学習成績

図7は目標語の使い方に関する成績を示している。意味的関連度の高い文脈は、低い文脈と比較して目標語の使い方を学ぶのに適していることがわかった。ただし、学習ストラテジーをあまり用いないグループは、たとえ文脈と目標語の意味的関連度が高くても、目標語の使い方をそれほど学べないことも示された。

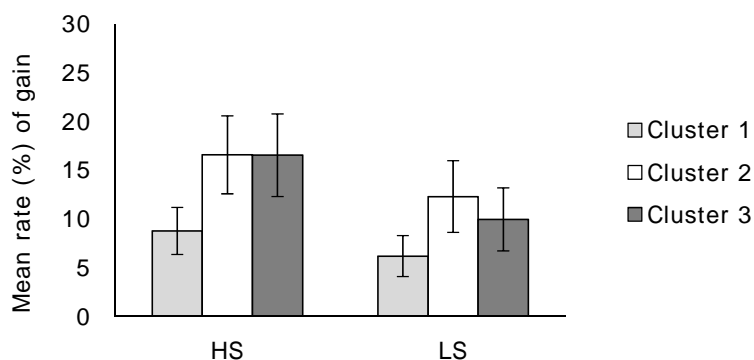


図7. 目標語の使い方の学習成績

本研究の成果は、言語統計解析モデルによるシミュレーションという手法を用いることで、どのような教科書や文脈で、どれぐらいのインプット量を与えれば「コンテキストの中で使える語彙知識」が身に付くのかを解明することに貢献できる。特に、英語検定教科書を中心とした学習者の知識モデルを構築し、学習者の語彙知識の発達過程を直接観察したデータとの対応を図ることで、小中高の英語語彙指導における最適な学習量と学習の質、およびそのバランスを明らかにできるようになるだろう。コーパス研究は教科書・教材の改善に有益な示唆をもたらす(石川, 2008)。本研究から示唆される、語彙習得とインプットの量と質の関係を基盤として、学習者の発達段階に応じた効果的な教科書や教材を作成することができるだろう。また言語統計解析モデルによる知識獲得のシミュレーションは、語彙知識に限らず、ライティング・スピーキング等の言語パフォーマンスにも応用可能であるため(Kintsch, 2007)、将来的には「外国語としての英語学習」に最適な学習量と学習の質を推定するための基礎データを提供できることが期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Sugita Chikako, Uchino Shunsuke, Akira Hamada	4. 巻 31
2. 論文標題 Collaborative action research on oral reading instruction for college-level developmental learners	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ARELE: annual review of English language education in Japan	6. 最初と最後の頁 287-302
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20581/arele.31.0_287	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Akira Hamada, Shuichi Takaki	4. 巻 Advance online publication
2. 論文標題 Approximate replication of Matsuda and Gobel (2004) for psychometric validation of Foreign Language Reading Anxiety Scale	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Language Teaching	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0261444819000296	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 飯田敦史, 山口高嶺, 奥切恵, 青田庄真, 新井巧磨, 鈴木健太郎, 多田豪, 辻りこ, 中竹真依子, 濱田彰, 藤尾美佐, 米山明日香, 木村松雄	4. 巻 6
2. 論文標題 教員養成課程コアカリキュラムの実態調査：大学教職担当者の見解から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JACET KANTO Journal	6. 最初と最後の頁 23-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 奥切恵, 濱田彰, 中竹真依子, 辻りこ, 米山明日香, 藤尾美佐, 木村松雄	4. 巻 1
2. 論文標題 JACET関東支部特別研究プロジェクトAー都道府県・政令市における英語教育研究テーマに関する実態調査ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中條清美・濱田彰・若松弘子・小林雄一郎・横田賢司・内山将夫・赤瀬川史朗・Michelle JOHNSON・西垣知佳子	4. 巻 51
2. 論文標題 教育用例文コーパス第4次開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学生産工学部研究報告B(文系)	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中條清美・若松弘子・濱田彰・西垣知佳子・Michelle JOHNSON	4. 巻 51
2. 論文標題 教育用例文コーパスSCoREを利用したDDL指導実践	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学生産工学部研究報告B(文系)	6. 最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中條清美・濱田彰・小林雄一郎・Michelle JOHNSON	4. 巻 51
2. 論文標題 英語初級者向け教育用例文コーパスSCoREの英文難易度評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学生産工学部研究報告B(文系)	6. 最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ushiro, Y., Hamada, A., Mori, Y., Hosoda, M., Tada, G., Kamimura, K., & Okawara, N.	4. 巻 62
2. 論文標題 Goal-oriented L2 reading processes in maintaining the coherence of narrative comprehension	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JACET Journal	6. 最初と最後の頁 109-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hamada, A.	4. 巻 29
2. 論文標題 Action research on EFL writing instruction using data-driven learning and the order of meanings approaches	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ARELE: annual review of English language education in Japan	6. 最初と最後の頁 305-320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20581/arele.29.0_305	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takaki, S., Hamada, A., & Kubota, K.	4. 巻 29
2. 論文標題 A systematic review of research designs and tests used for quantification of treatment effects in ARELE 13-28	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ARELE: annual review of English language education in Japan	6. 最初と最後の頁 129-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20581/arele.29.0_129	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 卯城祐司・濱田彰	4. 巻 6
2. 論文標題 新課程の英語教科書コーパスに基づくTOEIC語彙の特徴と難易度の推定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 TOEIC Research Report	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中條清美・濱田彰・Laurence ANTHONY	4. 巻 50
2. 論文標題 携帯端末で利用するWebSCoREの英語授業におけるユーザビリティ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本大学生産工学部研究報告B (文系)	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 中條清美・若松弘子・濱田彰・内山将夫・赤瀬川史朗・Michelle JOHNSON・西垣知佳子	4. 巻 50
2. 論文標題 教育用例文コーパスSCoRE第三次開発とSCoREを利用したDDL文法学習	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本大学生産工学部研究報告B(文系)	6. 最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計13件(うち招待講演 0件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 濱田彰・高木修一
2. 発表標題 媒介分析による外国語読解不安と授業成績の因果関係検証
3. 学会等名 第45回全国英語教育学会弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木修一・濱田彰
2. 発表標題 潜在ランク理論による外国語読解不安の段階性推定
3. 学会等名 第45回全国英語教育学会弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉田千香子・濱田彰・内野駿介
2. 発表標題 明示的な音読指導による音韻意識の向上がスペリング能力に与える影響
3. 学会等名 The JACET 58th International Convention(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hamada Akira, Takaki Shuichi
2. 発表標題 Effects of cognitive, strategic, and instructional aspects of foreign language reading anxiety on reading performance
3. 学会等名 American Association for Applied Linguistics 2019 Conference in Atlanta (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱田彰, 小林雄一郎
2. 発表標題 データ駆動型文法学習を促進する英語例文の特徴：学習者による主観的評価のモデリングから
3. 学会等名 2018年度英語コーパス学会DDL (Data-Driven Learning) SIGシンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥切恵, 濱田彰, 中竹真依子, 辻るりこ, 米山明日香, 藤尾美佐, 木村松雄
2. 発表標題 都道府県・政令市における英語教育研究テーマに関する実態調査
3. 学会等名 第1回JAAL in JACET学術交流集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉田千香子, 内野駿介, 濱田彰
2. 発表標題 明示的な音読指導による発音の自己モニタリング方略の変化
3. 学会等名 第44回全国英語教育学会京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 濱田彰, 高木修一
2. 発表標題 Matsuda & Gobel (2004) の追試を通した外国語読解不安尺度の妥当化
3. 学会等名 第44回全国英語教育学会京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chujo Kiyomi, Mizumoto Atsushi, Kobayashi Yuichiro, Hamada Akira, Oghigian Kathryn
2. 発表標題 Evaluating the appropriateness of the Sentence Corpus of Remedial English to benefit beginner level EFL students
3. 学会等名 13th Teaching and Language Corpora Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中條清美, 濱田彰
2. 発表標題 教育用例文コーパスの公開とDDL実践
3. 学会等名 英語コーパス学会2018年度春季研究会DDL研究会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hamada, A.
2. 発表標題 Evidence-based practice in extensive reading among Japanese EFL learners
3. 学会等名 American Association for Applied Linguistics 2018 Conference in Chicago (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木修一・濱田彰・久保田恵佑
2. 発表標題 英文読解および語彙指導の効果推定に用いられる研究デザインの系統的レビュー
3. 学会等名 JACET英語語彙研究会第14回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中條清美・濱田彰・小林雄一郎
2. 発表標題 データ駆動型学習用コーパスSCoREを構成する英文の評価：英文難易度、教育用語句のカバー率、および意味分野別カバー率の分布から
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第48回年次研究集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 濱田彰	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 11
3. 書名 小学校外国語教育の点検・評価	

1. 著者名 卯城祐司・名畑目真吾・長谷川佑介・木村雪乃・濱田彰・土方裕子・星野由子・中川知佳子・清水遥・高木修一・田中葉採・細田雅也・森好伸	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 192
3. 書名 初等外国語教育（MINERVAはじめて学ぶ教科教育）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Hamada Akira | SLA Lab  
<https://hamada-lab.jp/>  
ResearchGate  
[https://www.researchgate.net/profile/Akira\\_Hamada](https://www.researchgate.net/profile/Akira_Hamada)  
Researchmap  
<https://researchmap.jp/HamadaAkira/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------